

教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

子どものトラブル対処法

今回は「子どものトラブル対処法」をテーマにしました。

1 自分の主張が受け入れられない

校庭では子どもたちがドッジボールに興じています。

しかし、いつもは中心となってボールを追っているA君がいません。どこにいるのかと辺りを見回すと、校庭の隅で膝を抱えています。どうやらトラブルがあったようです。

「ラインを越えた」と相手チームから抗議があり、「越えていない」と反論しても認めてもらえなかったため、その場から去ったのです。

Q1

A君にどんな言葉をかけますか。

- ① 気にしないでみんなの所に行こうよ。
- ② 君は悪くない。
- ③ ラインを越えていないんだよね。

「①」は、励ましているつもりでしょうが、逆効果です。

A君はラインを越えた認識がないのですから、自分には非はなく、相手チームの言い分が間違っていると確信しています。

そんな彼を説得しようと思うのは火に油を注ぐようなものです。A君は自分の正当性を認めて欲しいのです。

「②」は依怙地にさせるだけです。

自分の主張が止しかったという思いが募るほど、相手を責めるだけで、自分の落ち度を振り返ることをしなくなります。客観的に自分を見ようとしなくなるのです。

私なら「③」です。

A君の不満の表れが、「その場から去る」という行動を誘発しています。彼は納得していないのです。自分の気持ちを誰もわかってくれないと悲しい気持ちになっています。

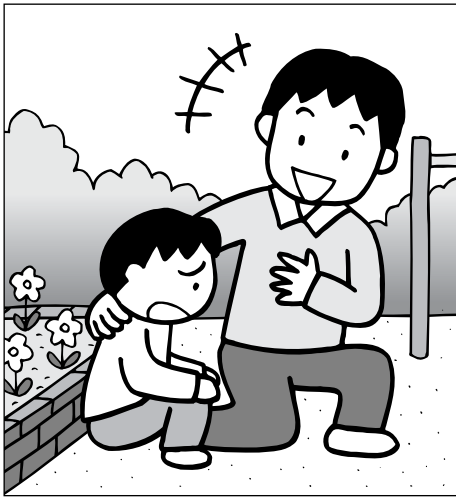
それをわかってやるのです。共感するので。教師は理解者になってやるのです。「味方」ではありません。あくまでも「理解者」です。

どうして、「味方」ではなく「理解者」なのか。それは、本当はラインを越えているかもしれないからです。当事者は自分の非に気づかないものです。夢中になっていればいるほどそうなります。

ここは彼の言い分を聞いて、とりあえず「寄り添う」ことです。非難され、周りが全員敵に見える人がいるのが、「自分の気持ちをわかってくれる人がいる」と思うことで安心感を持ち、心を開ききっかけになります。

話を聞きます。心を開かせる。それには「待つ」ことです。

これこそ「癒し」の指導です。



2 集中攻撃され、怒り心頭

先ほどの事例はどちらにも正義があります。

それに対して、次の事例は明らかに片方だけに分があります。

ドッジボールをしていたB子さんが教室に駆け込んできました。私の顔を見るなり興奮気味に訴えます。

「もう男子と一緒にドッジボールなんかしたくない。私だけ集中攻撃するんだよ。ずるいんだよ」相手チームの男子がB子さんだけを狙い撃ちしたようです。最初はどんなボールでもキャッチしていたのですが、さすがのB子さんも最後まで「内野」にいられたかったです。

B子さんは活発な女子です。運動が得意でドッジボールも「強い」と言われています。弁が立ち、口喧嘩をすると男子はたじたじとなり後塵を拝します。正義感が強く、正論を述べます。反論が出来ない男子はほうほうの体で退散することもたびたびです。

そんなB子さんに、普段は「負け」ている男子が、ここぞとばかりに攻撃したようです。

Q2

B子さんにどんな言葉をかけますか。

- ① 男子は「ずるい」のか。
- ② やり返したらいいじゃないか。
- ③ B子さんが強いから男子はひがんでいるんだよ。
- ④ 気にしないで、もう一回やろうよ。

教師の腕前が試される、学級経営のひとくふう。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

「②」は火に油を注ぐようなものです。先生の言葉を錦の御旗にして、勇んで校庭に駆けっていきます。転がってきたボールを男子に投げつけるB子さんの様子が目に浮かびます。男子は一瞬不意を突かれますが、すぐに喧嘩勃発です。

「③」はB子さんの力量を認め、男子の非を指摘しています。B子さんの気持ちは収まりません。しかし、男子に対して悪感情をさらに持たせてしまいます。

「④」では何の解決にもなりません。「気にしない」方策が示されなければ、「もう一回やろう」という気になりません。

また、「先生は何もわかっていない。私の気持ちを理解してくれない」と不信感を持ちます。

このケースは「①」のようにB子さんの気持ちを受け入れることを優先します。

「ずるいのか。頭にきちゃったんだよね。だから、教室に帰ってきたのか」とB子さんの不満を受け入れ、教室に戻ってきたことを肯定します。教師は自分の意見を述べることを控えます。

そのうち、B子さんの気持ちは落ち着き始め、「男子への不満」から「ドッジボールが出来なくなった辛さ」に心情が変化していきます。

「ドッジボールをやりたいなくなって教室に戻ってきたのではないよね」

「ドッジボールをやりたいんだね」

教師は、B子さんが「本当はドッジボールをしたがっている」という気持ちを引き出します。すると、B子さんは今までの不満顔が嘘

のように、笑顔で校庭に向かっています。子どもの不満を聞くことが、仲間のもとに戻る勇気づけの指導になります。

3 やられたからやり返した子

「叩かれました」

C君が訴えます。後ろに座っているD君が叩いたのです。叩かれただけでなく、筆箱もとられたと訴えます。筆箱はすぐに戻してもらったのですが、怒りは収まりません。

D君を呼んで事情を聞くと、次のような状況です。

- ・ C君が授業中に後ろを向いて話しかけてきた。
- ・ 「前を向いて」と注意しても言うことを聞いてくれない。
- ・ C君が悪態をついたので、思わず手が出た。
- ・ C君が「何で叩くんだ」と文句を言うので筆箱を取り上げた。

叩かざるを得ない状況をC君が作った、というこのようです。C君に確認すると間違いないと認めます。

Q3 二人に対してどんな対応をとりますか。

- ①原因を作ったC君を注意する。
- ②「お互い様だね」と両者の言い分を認める。
- ③「これからどうする」と子どもに投げかける。

どちらに非があるのかといえば、C君です。ですから、「①」は妥当な判断です。しかし、子どもはそう解釈しないのです。

子どもは、自分のことは棚に上げて、叩かれたり筆箱をとられたりしたことを主張します。自分も被害者だということです。だから、「C君が悪い」と言われたら、「先生の指導は不公平だ」と不満を持ちます。

「②」は「喧嘩両成敗」と水に流すことを勧めているのですが、相手に非があると思っっている二人は納得しません。

今回のトラブルのきっかけは、後ろを向いたC君にあるのですが、C君は「筆箱をとられた」と被害者意識を持っています。

私は「③」のように解決方法を子どもに預けます。

冷静になれば互いに行き過ぎた点があったことを察します。C君は「僕が後ろを向かなければこんなことにはならなかった」、D君は「もう少し優しく注意すればよかった」となり、時間の経過とともに相手を許せるようになってきます。こうなったら指導の終末は間近です。二人に聞きます。

「どうしたい。先生が役に立つことあるかなあ」 今回のトラブルは、二人の関係修復がポイントです。

